

甲ノ原遺跡発掘調査概報Ⅲ

昭和 57 年 3 月

島根県 隠岐島後教育委員会

正誤表

| 頁 | 行 | 類 | 正 |
|---|----|--------|--------|
| 2 | 14 | 摩尼寺と称し | 摩尼山と称し |
| 5 | 3 | 磁北線 | 東西線 |
| " | " | 東西線 | 磁北線 |

例　　言

- 本書は、隱岐島後教育委員会が国庫、県費補助を受けて、昭和56年度に甲ノ原遺跡及び尼寺原遺跡（蔵見口地区）において実施した発掘調査の概報である。調査は、同補助を受けて、昭和54年度から継続的に行っているものである。
- 調査は、近い将来に予想される開発にそなえて、遺跡保護対策を立てるための基礎資料を得る目的で行ったものである。

3. 調査組織

| | | |
|------|-------|------------------|
| 調査指導 | 勝部 昭 | 鳥取県教育委員会文化課係長 |
| | 石井 悠 | " " |
| | 松本 岩雄 | " 主事 |
| | 村尾 秀信 | " " |
| | 若林 久 | 隱岐島後文化財専門委員 |
| | 野津 大 | " |
| | 半田弥一郎 | " |
| 調査員 | 木瀬 一郎 | 隱岐島後教育委員会社会教育課係長 |
| | 金崎 慎二 | " 主事 |
| | 横田 登 | " 嘱託 |
| 事務局 | 齊藤 眞 | 隱岐島後教育委員会社会教育課長 |
| | 宇野 千草 | " 職員 |

- 調査にあたり、土地所有者の村田利三郎、田中猪四郎両氏には多大な御協力を頂いた。記して感謝の意を表したい。
- 現場における発掘作業に参加、又、遺物整理等御協力を頂いた下記の方々の名を記し、感謝の意を表する次第である。

| | | | | | |
|-------|-------|-------|------|-------|-------|
| 尾林アツコ | 齊藤ヨシコ | 繁浪タネコ | 高梨信枝 | 高梨福次郎 | 藤田マスコ |
| 松林フサコ | 村上智恵子 | 村上トシエ | 村上ナヲ | 村上百合子 | 横地正直 |
- 本書の編集、執筆は、調査指導の先生方の助言を受けながら、木瀬一郎、金崎慎二、横田登の3名が協議しながら行った。
- 挿図中の矢印は真北を指す。なお、西郷における磁気偏角度はN7°0'Eである。
- 本書中の高さは海拔高である。
- 遺構表示は次のとおりである。

| | | | | | |
|-----|--------|-----|--------|-----|---------|
| S B | 獨立柱建物跡 | S K | 土壤、瓦溜め | S D | 溝跡、溝状遺構 |
| S A | 欄列、柱穴列 | S I | 住居址 | S X | 特殊遺構 |

目 次

| | |
|-------------------|----|
| I 調査にいたる経過 | 1 |
| II 遺跡の位置と環境 | 2 |
| III 調査区の設定 | 5 |
| IV 造構と遺物 | 6 |
| V おわりに | 13 |

I 調査にいたる経過

島根島後においては、1978年の文化庁発行「全国遺跡地図 島根県」によると、170を超える埋蔵文化財包蔵地が所在する。それら包蔵地の中で、いわゆる散布地として登録されている遺跡は、20ヶ所前後にも及ぶ。他の地方と同様な開発の波の中で、遺跡の保存活用を図っていくために、そうした遺跡の総合的な性格、範囲等の把握の必要性が強く叫ばれているところであった。

このような状況の中で、昭和54・55年度に、国、県よりの補助を得て、西郷町下西所在の甲ノ原遺跡、同じく下西所在の能木原遺跡の発掘調査を行うことができた。そして、本年度は西郷町有木所在の尼寺原遺跡（藏見口地区）の発掘調査を実施することとなったものである。

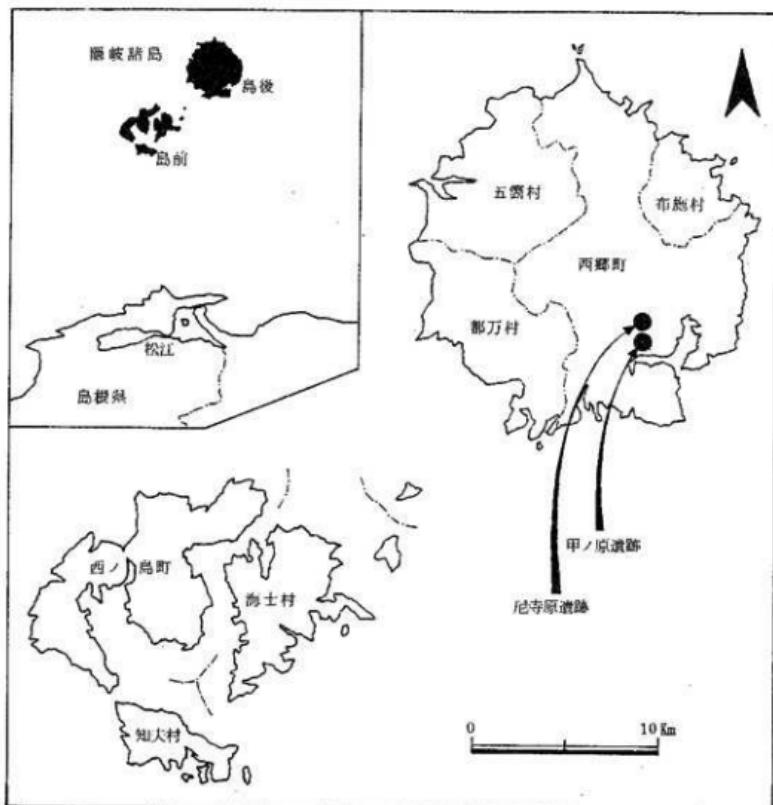


図1 遺跡位置図

II 遺跡の位置と環境

尼寺原遺跡は、隱岐諸島の中の島後と呼ばれる島にあり、その地籍は島根県隱岐郡西郷町大字有木字野中、尼寺原、殿屋敷、藏見口である。

隱岐諸島は、島根半島の北方沖合 50 ~ 80 km に散在する 4 つの住民島と、大小 180 余の無人島から成っている。4 つの住民島は大別して島前、島後と呼ばれ、島前というのは西ノ島、知夫里島、中ノ島の 3 島の総称であり、島後というのは島後一島の呼称である。島後は隱岐諸島の北東部に位置し、郡島中最大の面積を持ち、古くより隱岐の政治、文化の中核的役割を果してきたところである。ほぼ円形に近い形をしている。僅かに南東部、北西部にそれぞれ西郷湾、重柄湾が切り込みを作っており天然の良港となっている。なかでも西郷湾は、中世以降日本海を航行する帆船の寄港地として栄えてきた。

島の地勢をみると、主峰大満寺山 (608 m) を中心とする山地は起伏がはげしく、それらが海岸まで続いている、断崖絶壁の海岸線を作っている。こうした中で、島の北西部の五箇村、南東部の西郷町中条地区、北東部の西郷町中村地区、南西部の郡万村にはまとまった平地がある。中でも西郷湾に流れ込む隱岐最長の川、八尾川の形成した八尾平野は、隱岐最大の耕作地帯を成している。

ここで述べる尼寺原遺跡は、大満寺山（古くは摩尼寺と称し、大満寺山は大摩尼山の転訛したものと言われる）から南南西に延びた支脈の丘陵上にある。標高 40 m 余りで、すぐ南には八尾平野が広がっている。この丘陵は通称尼寺山、あるいは尼寺原と呼ばれ、遺跡は丘陵の東寄りに位置している。丘陵西寄りには 500 m 程はなれて隱岐国分尼寺跡、さらにそこから西方約 400 m には隱岐国分寺が現存している。

この尼寺山、尼寺原の地名は國分尼寺に起因すると思われる。「隱州視聴合紀」（寛文七年）には、「尼寺村は村に尼寺あり、松竹一村の小岡にして農夫あり、南にドレバ大光寺村なり」、又、「隱岐古記集」（文政年間）にも「尼寺村に尼寺あり、一略一」とある。これらの記述を総合すると、江戸時代文政年間頃までは尼寺が存在し、その地を尼寺村と呼んでいたことが分かる。さらにその位置も、現在尼寺原と呼ばれている所とほぼ食違はない。尼寺の存在はいつの頃までか定かではないが、尼寺村という村名は明治の初めまでは残っていた。それが明治 5 年に小原村と改称された。これは明治初頭の廢仏毀釈運動の名残りとも言えるものである。すなわち隱岐における廢仏運動は隱岐騒動ともからまって、他に類例を見ないほどの惨憺さを示し、その結果、尼寺村のように寺号による村名は、ほとんどが改称された。島後における他の例では、護国寺村が八田村、國分寺村が池田村、大光寺村が石井村にそれぞれ改称された。

さて、この尼寺原遺跡の付近には多くの遺跡が分布している。まず縄文時代の遺跡には八尾平野をへだてて向い側の下西台地の大将軍遺跡、荒尾・白髮など西郷湾西部海岸沿いの下西海岸遺跡などがある。そして、距離的にはやや離れるが、西郷湾の東部海岸には宮尾遺跡がある。隱岐の縄文文化と

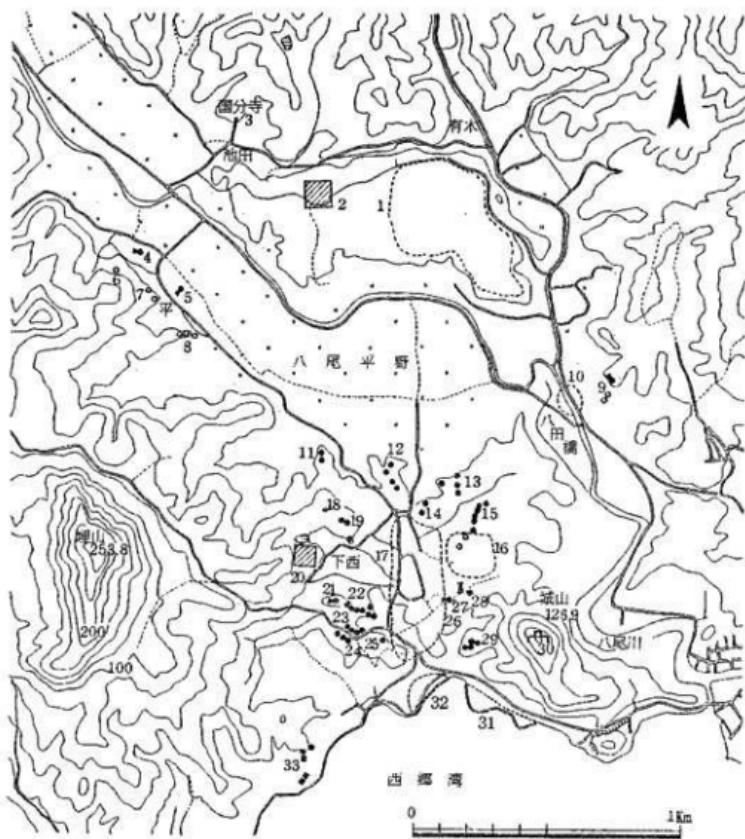


図2 調査地周辺の遺跡分布図

(○) 遺物包含地 ■ 前方後円墳 ● 円墳 ▲ 方墳 ○ 墓形不明 ▨ 寺院址 ▶ 城跡

1. 尼寺跡遺跡 2. 堀枝国分尼寺跡 3. 隆岐国分寺 4. 平神社古墳 5. 子安神社古墳 6. 平西古墳
7. 平東古墳群 8. 山古墳群 9. 名田古墳群 10. 月無遺跡 11. ヒノメサン古墳群 12. 小田原宅裏古墳群 13. 齊京谷北古墳群 14. 齊京谷南古墳群 15. 齊京谷古墳群 16. 能木原遺跡 17. 甲ノ原遺跡 18. 御碕神社古墳群 19. 楠古墳 20. 楠得寺跡 21. 玉若酢命神社西方古墳 22. 玉若酢命神社古墳群 23. 玉若酢命神社境内古墳群 24. 玉若酢命神社南方古墳群 25. 倭姫氏裏山古墳 26. 二宮神社古墳 27. 国府原二号墳 28. 七人塚古墳 29. 白髮古墳群 30. 国府尾城跡 31. 下西海岸遺跡 32. 西森氏宅裏遺跡 33. 大座古墳群

山陰本土のそれと比較すると、時代編年において大差なく、その頃（あるいはそれ以前）から、離島という条件にもかかわらず交流があったものと思われる。それは石器、土器の両方から言える。すなわち、縄文時代の石器の代表的原材料である黒曜石は、山陰地方においては隱岐島後にしか出土地はないといわれているにもかかわらず、山陰各地の遺跡からは、隠岐産と思われる黒曜石製石器が数多く発見されている。土器の流れも、条痕文土器、瓜型文土器、縄文地土器、刻目突帯文土器……等々と続き、山陰本土のそれと深い関係を示している。

弥生時代の遺跡には月無遺跡がある。位置は八尾平野の東南端八田橋付近で、八尾川改修工事の時に発見され、土器と共に耕作用具も出土している。又、列状の木杭も確認されている。

古墳の分布密度は、八尾平野の南、下西地区が最も高いと言える。形態は小円墳が多く、副葬品は少ない。後期の古墳が中心で、前期の古墳は今のところ見当らない。こうした中で八尾川流域の古墳を見ていくと、早い時期の古墳としては、下西丘陵の5世紀代の齊京谷北古墳群がある。径2.5m前後の円墳群で、出土品には鉄直刀、鐵鏃などがある。6世紀に入ると小円墳が多数築かれてくる。又、前方後円墳も作られるようになり、下西台地の北西方に位置する平神社古墳、子安神社古墳、下西地区の国府原二号墳、玉若酢命神社西方古墳などがある。中でも平神社古墳は隠岐最大のもので、全長約5.0m、後円部径約2.7m、高さ5m余の墳丘を持ち、くびれ部には削石積みの横穴式石室がある。又、隠岐において、埴輪を出土している唯一の古墳もある。さらに八尾平野東部の大光寺から八田にかけての丘陵上にも、前方後円墳を含む多数の墳丘が知られており、島後における代表的な古墳がこの平野の周辺に集中している。

奈良時代に入ると八尾平野周辺地域は政治の中心地となっていたと思われる。それは、下西地区に國府跡が比定され、八尾平野の南端には条里遺構が確認されている。さらに隠岐岡の總社として祭政一致の権力をふるったと思われる玉若酢命神社もこの地にある。

このように八尾平野周辺には各々の時代ごとに数多くの遺跡が分布している。ただ、注意すべきは、八尾平野周辺地域といっても、これらの遺跡はそのほとんどが八尾平野南方の下西地区に集中しており、この尼寺原遺跡の所在する北側の丘陵地には、前代の遺跡が極めて少ないとということである。

参考文献

隠岐支庁『隠岐島誌』 昭和18年

山本清「隠岐古墳調査報告」 昭和30年

藤田一枝「隠岐島先史時代の遺跡について」 「隠岐郷土研究」 第2号所収 昭和32年

勝部明生「齊京谷古墳」 関西大学島根大学共同隠岐調査会編『隠岐』 所収 昭和43年

山本清「初期寺院跡」 関西大学島根大学共同隠岐調査会編『隠岐』 所収 昭和43年

隠岐島後教育委員会『隠岐國分尼寺調査報告』 昭和46年

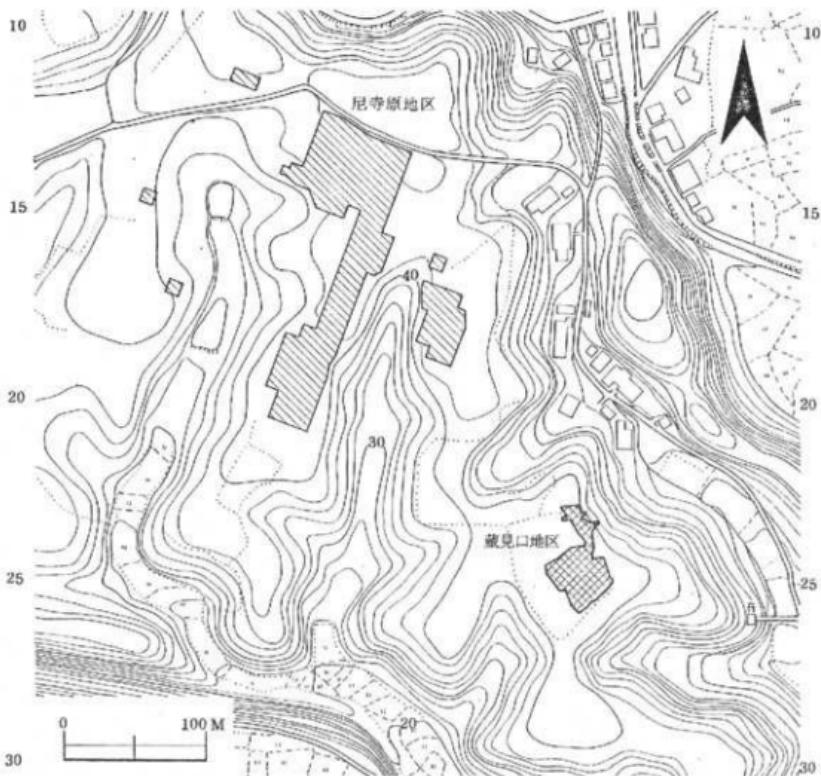
隠岐島後教育委員会『八尾川流域条里制遺跡』 昭和53年

田中豊治『隠岐島の歴史地理学的研究』 昭和54年

III 調査区の設定

調査区の設定については、対象区全域に方眼を組むことにした。対象地南端に基準杭を設け、磁北線を基準にとり、それと直交する東西線を座標軸に $2 \times 2\text{ m}$ の方眼を組んでグリッドの一単位とした。磁北線は南から北へ 2 m ごとに N 1、N 2、N 3……とし、同様に東西線は西から東へ E 1、E 2、E 3……とし、グリッド名は北東コーナーの交点の記号で呼ぶことにした。

なお、前述の基準杭を N 1000 E 1000 とした。



■ 昭和 53・54 年度調査区（島根県教育委員会）

■ 昭和 56 年度調査区

※『尼寺原遺跡発掘調査報告書』（昭和 55 年 3 月、島根県教育委員会）を基に作成したものである。

図 3 調査区配置図

IV 遺構と遺物

1. 遺構

1) 掘立柱建物跡

建て替えなどを含めて23棟検出された。それらは建物方向、プラン等から判断して二時期に大別できると思われるが、それぞれの新旧関係は不明である。一部柱穴からは、土器片が出土しているが、小片であるために、細かい年代については判断しにくい。

新旧は不明であるが、建物方向により仮にA期・B期と分類すれば次のとおりになる。

A期 SB 01~11

※建物主軸が、磁北に対して西に偏している。

| | |
|------------|-----|
| 2間×2間 | 5棟 |
| 2間×2間 (総柱) | 3棟 |
| 1間×2間 | 1棟 |
| 2間×2間以上 | 1棟 |
| 1間以上×3間 | 1棟 |
| 計 | 11棟 |

B期 SB 12~23

※建物主軸が、磁北に対して東に偏している。

| | |
|-------|-----|
| 1間×2間 | 11棟 |
| 1間×3間 | 1棟 |
| 計 | 12棟 |

以下、それぞれの掘立柱建物跡について概要を記すことにする。

SB 01 2間×2間の総柱の建物跡である。柱間距離は桁行170cm、梁行150cmで、柱幅形は径40~50cm、残存部分の深さは25~30cmほどである。一部柱穴には柱痕跡が残っているが、それを見ると、柱径は15cm前後である。プランもかなりしっかりした建物跡である。

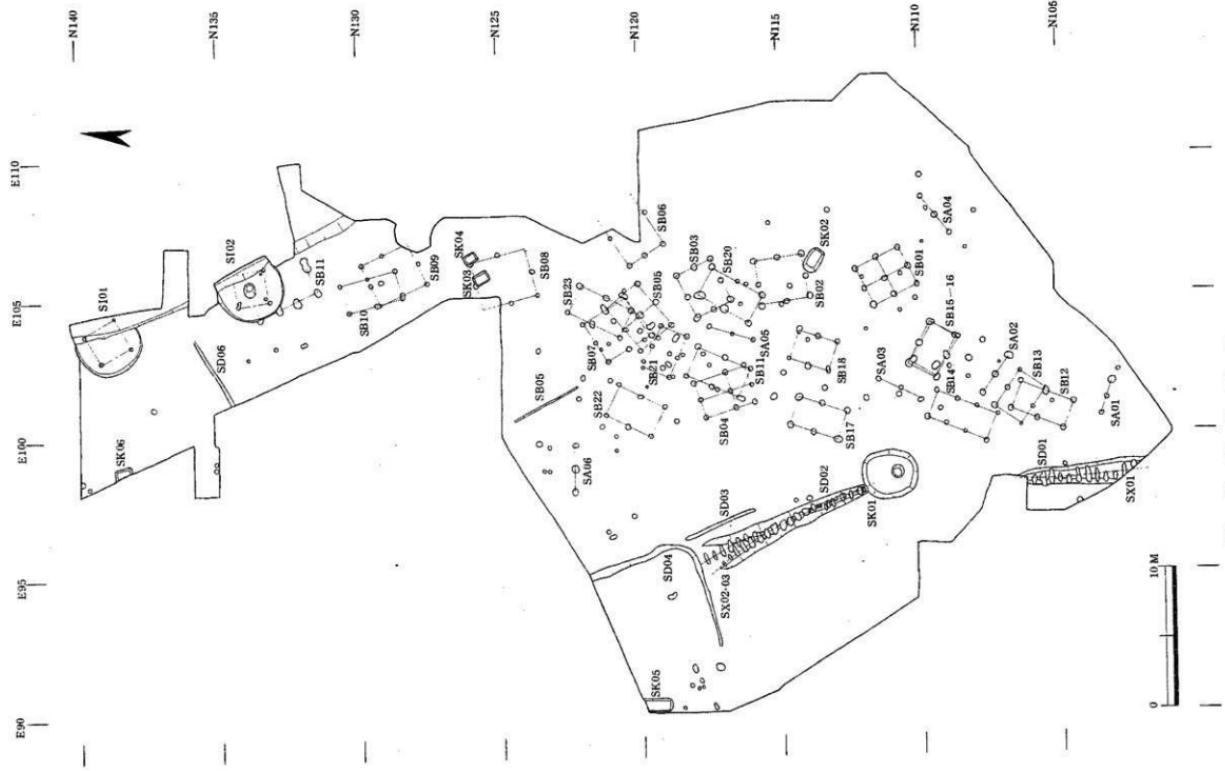
SB 02 SB 01の北側に少し離れて検出されたもので、同じく2間×2間の建物跡である。柱間距離は桁行175cm、梁行160cmで、SB 01よりもやや大きいものである。柱幅形は径50cm前後、深さはあまり良く描ってなく、15~35cmとなる。

SB 03 2間×2間の建物跡である。柱間距離は桁行165cm、梁行140cm、柱幅形径50cm前後、深さは30cmほどである。

SB 04 2間×2間の総柱の建物跡である。柱間距離は梁行130cmであるが、桁行は1間目と2間目が異なり、1間目は150cm、2間目は225cmとなる。

SB 05 2間×2間の総柱の建物跡である。柱間距離は桁行190cm、梁行145cmである。このSB 05と後述のSB 07は重なっているが、重複している柱穴の切り合い関係を見るとSB 05の方がSB 07より新しいことが分かる。

SB 06 この建物跡は、東側の柱穴5個分しか検出されていない。他の建物跡と比較すると、総柱になるかどうかは分からぬが、同じように2間×2間の建物跡となる可能性が強い。そうすると桁行約250cm、梁行150cmの東西棟建物跡となる。



國
文
學
概
論

S B 0 7 前述のS B 0 5と重なっているものである。2間×2間で柱間距離は桁行1 8 0 cm、梁行1 6 0 cm。柱掘形は径4 0 cm前後、深さは1 0 ~ 3 0 cmほどである。

S B 0 8 この建物跡が検出されたあたりは、地山がかなり削平されており、柱穴の遺存状態は良くない。そのため、東南隅の柱穴は確認できなかったが、他の柱穴のプランがしっかりしているので、2間×2間の建物跡S B 0 8として取扱うこととしたものである。同様な理由で、縦柱の建物跡となる可能性もある。柱間距離は桁行1 9 5 cm、梁行1 8 0 cmで柱掘形径は4 0 ~ 5 0 cmほどである。残存部分の深さは、前述のように遺存状態が悪いため5 ~ 1 0 cmほどであるが、柱痕跡ははっきりしており、径は1 0 ~ 1 5 cmほどである。

S B 0 9 2間×2間の建物跡である。柱間距離は桁行1 9 0 cm、梁行1 6 0 cmで柱掘形径は4 0 cm前後である。深さは1 0 ~ 2 5 cmほどである。

S B 1 0 1間×2間の南北棟建物である。桁行1 9 5 cm、梁行2 1 0 cmで柱掘形は径3 0 cm前後、深さは1 0 ~ 1 5 cmほどである。前述のS B 0 9の柱穴と一部重複しており、切り合いを見ると、このS B 1 0の方がS B 0 9より古いものとなる。

S B 1 1 この建物跡は東側柱3間分と南側1間分が検出されている。この南側の1間分はまだ東側へ延びるものと思われる。ただ、地形の関係から見て（東側はすぐ斜面となっておりている）3間以上に延びるとは思えず、斜面際の他の遺構とも比較して、ここでは2間位と推定しておきたい。柱間距離は桁行1 4 5 cm、梁行は1 9 0 cm前後になるものと思われる。柱掘形はかなりしっかりしており、深さは3 5 ~ 5 0 cmになる。このS B 1 1は、後述の壁穴住居S I 0 2となっており、切り合いによればS I 0 2より新しいものとなる。

S B 1 2 1間×2間の建物跡である。柱間距離は桁行2 0 5 cm、梁行2 0 0 cmで柱掘形は径4 0 ~ 5 0 cm、深さは2 0 cm前後である。

S B 1 3 1間×2間の建物跡である。柱間距離は桁行1 5 5 cm、梁行2 2 5 cmである。柱掘形は3 0 cm前後で小さく、深さも1 0 ~ 1 5 cmほどである。前述のS B 1 2と重なっているが切り合いは不明である。

S B 1 4 1間×3間の建物跡である。柱間距離は桁行1 5 5 cm、梁行2 0 0 cmである。

S B 1 5・1 6 柱穴の切り合いにより、古い方をS B 1 5とし、このS B 1 5の建て替えられたものをS B 1 6として取り扱うこととした。1間×2間で、柱間距離は梁行はどちらも2 1 5 cm前後であるが、桁行はS B 0 5の方が1 7 0 cm、S B 1 6の方は1 6 0 cmほどである。柱掘形は径5 0 cm前後のしっかりしたものである。

S B 1 7 1間×2間の建物跡である。柱間距離は桁行1 8 0 cm、梁行2 1 0 cmである。柱掘形は径5 0 cm前後、深さ2 0 ~ 2 5 cmのしっかりしたものである。

S B 1 8 1間×2間の建物跡である。柱間距離は桁行1 5 0 cm、梁行2 1 0 cmである。柱掘形は深さは大体1 5 cm前後で揃っているが、径は2 0 cm強位のものから、5 0 cm弱位のものまで、かなりバラツキがある。

S B 1 9 1間×2間の建物跡である。柱間距離は桁行205cm、梁行225cmである。柱掘形は径40cm前後、深さは25~35cmほどである。

S B 2 0 1間×2間の建物跡である。柱掘形は径35~55cm、深さ20~30cmほどである。柱間距離については、前述のS B 1 9とはほぼ同じである。

S B 2 1 1間×2間の建物跡である。柱間距離は桁行160cm、梁行205cmである。柱掘形は径30cm前後と小さく、深さも20cm前後である。

S B 2 2 1間×2間の建物跡である。柱間距離は桁行180cm、梁行240cmである。柱穴遺存状態はあまり良くなく、深さは人体10cm前後で、浅いものでは数cmしか残っていない。

S B 2 3 1間×2間の建物跡である。柱間距離は桁行、梁行共に210cmである。

2) 棚列

6列検出されている。全て2間分である。どの建物跡に関係するのか不明であるが、方向だけから判断して、前述の掘立柱建物群の時期に分類すると、A期-1列(S A 0 4)、B期-4列(S A 0 1、0 2、0 3、0 5)、不明-1列(S A 0 6)となる。

E98 E99

3) 溝状遺構

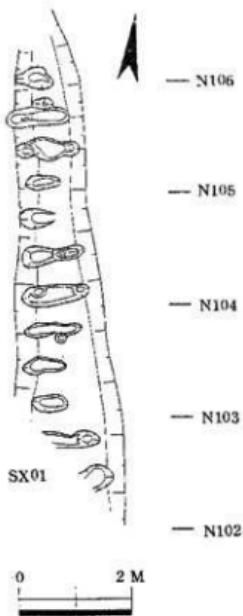
6条検出されているが、前述の掘立柱建物群との関連、性格等については不明である。

S D 0 1 調査区の南端部分で、約10mにわたって検出された。ほぼ南北に走り、底部は緩かな弧を描いており、深さは15~20cmほどである。伴出遺物は無く、年代は不明である。底部から後述の特殊遺構S X 0 1が検出されている。

S D 0 2 ほぼ南北に走り、南側はS K 0 1(後述)と重なっているが、切り合いによればS D 0 2の方が新しい。S D 0 1と同じような形状、埋土の状態である。底部からS X 0 2・0 3(後述)が検出されている。

S D 0 4 S D 0 2の北側でほぼ南北に走り、途中で折れて西に向かっている。土師器の小片が出土している。

S D 0 3・0 5・0 6 いずれも小規模なもので、伴出遺物も無く、詳細は不明である。



4) 上塙

S K 0 1 径約4mの円形で、深さは60cm位である。底部中央よりやや南側に、径60~80cmの長円形の落ち込み(深さ10cm程度)がある。中の土層は数層

図5 SD01・SX01実測図

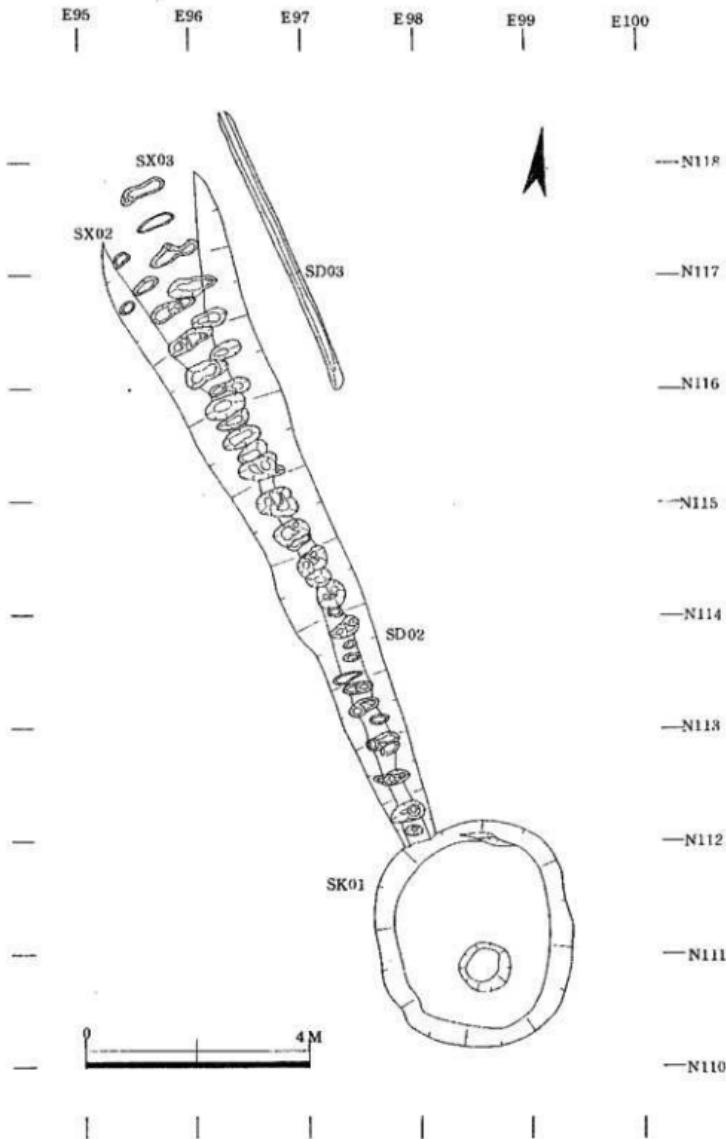


図6 SK01・SD02・03・SX02・03 実測図

に分かれ、中ほどの層に土器片を含む層がある。円い礫石も数点出土しており、底部には炭化物が多い。このSK01は、形状、底部にある炭化物の層、炉跡を思わせる落ち込み等、堅穴住居址を思わせる。ただ、柱穴、側溝等確認できず、ここでは単に土壙として扱っているが、今後、検討の余地があると思われる。

S K 0 2 • 0 3 • 0 4 • 0 5 • 0 6 調査区内で不規則的に検出されている。形は大体隅丸の長方形といえる。埋土は非常に軟質で、伴出遺物は無い。これらは、近世以降の畑作等の関係のものと思える。

5) 特殊遺構

小判状小土壙とでも呼ぶべきものが、60~70cmの間隔で連続するもので、3列検出された。

S X 0 1 • 0 2 • 0 3 SX01はSD01の底部から、SX02・03はSD02の底部から、それぞれ検出された。SD02底部の土壙列は、これら土壙列の深さ、及びSX01の間隔等と比較して2列と判断したものである。SX02、SX03の土壙列はかなり重複しているが切り合いは不明である。どちらの埋土も青灰褐色の、砂岩を思わせるようなかなり硬質なものである。SX01の埋土も同様である。一つの土壙内より須恵器の小片が出土している。

この特殊遺構は、他の地方においては、あまり類例が無いようであるが、隱岐島後においては現在まで2つの例が報告されている。一つはここと同じ尼寺原遺跡で、この蔵見口地区の西北方、尼寺原地区においてである。これは、昭和53・54年度に島根県教育委員会によって行われた発掘調査によるものである。「尼寺原遺跡発掘調査報告書」(昭和55年3月 島根県教育委員会)によると、多数の掘立柱建物群、あるいは堅穴状遺構と共に見つかっており、ほとんどの土壙底部に、須恵器小片、小石があったことが報告されている。他の一例は、前年度行った西郷町下西の甲ノ原遺跡発掘調査によってであり、この時は尼寺原地区と同様な状況であった。今回、この蔵見口地区で見つかった特殊遺構は前述の二例と比べて、ほとんど遺物が無いというのが気にかかるところもある。いずれにしても不明な点ばかりであり、今後他地区の類例報告を待ち、さらに、他の遺構との関連等、検討を加えていきたい。

6) 住居址

調査区の北端部分、密集している掘立柱建物群が途切れるあたりで、2つの堅穴住居址が検出された。どちらも東側部分が1/3程削られている。ここでは形状について簡単に記し、次の項でやや詳しく述べることにしたい。

S I 0 1 東側が削られていて確認はできないが、推定復原すると、形は円形と隅丸方形の中間位の感じのする堅穴住居址である(ほぼ円形といって良いが)。床面径は約4m程で、柱穴は床面に4つと、壁面に1つ確認された。壁面は垂直に近い形で掘られている。床面周囲には、深さ5~10cmの溝が切られている。

S I 0 2 推定復原するとほぼ円形の堅穴住居址である。ほとんどS I 0 1と同じ形状である。柱穴は3つしか確認されていないが4柱を持つものと思われる。中央に炉跡と思える落ち込みがある。

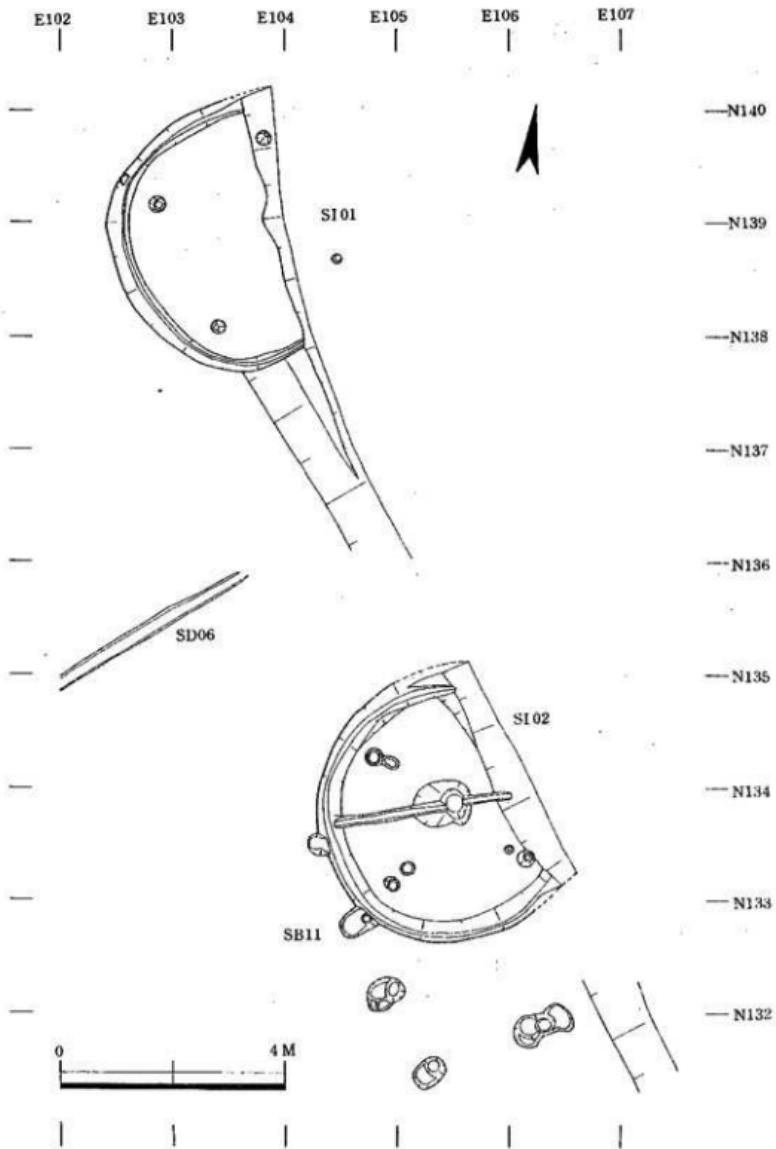


図 7 SI 01・02・SB11・SD06 実測図

2. 遺物

この調査区で出土した遺物は、須恵器・土師器、玉石、礫石などである。土器については、そのほとんどを土師器が占め、須恵器は極く僅かである。遺物は遺構に伴うものは少なく、調査区西側の谷状に落ち込んだ部分から多く出土している。遺構に伴うものとしては、掘立柱建物群の一部柱穴から出土した土師器片、堅穴住居址から出土した玉石、土師器がある。柱穴から出土した土師器は、極く小片であるため、ここでは S I 0 2 出土の土師器について、簡単に説明を加えたい。

S I 0 2 から出土した土師器は、まだ整理検討中ではあるが、少なくとも壺形土器が 2 個体分はある。いずれも細分化されてはいるが、口縁部は良く残っており、これを見ると、いわゆる 5 の字形口縁の古式土師器と呼ばれるものである。

山本清氏の「山陰の土師器」によると、弥生式土器の直後から須恵器の普及期以前のものを古式土師器としており、さらに壺形土器については、平底のものを前期、丸底のものを後期としている。

先ほど少なくとも 2 個体分と記したが、それらの中に丸底と思われる破片があり、これが同一個体と確認されれば、この土師器は丸底を持つ壺形土器となり後期に属す。

島後においては古式土師器の出土例は少なく、不明な点が多い。この編年をそのまま当てはめるのは危険かもしれないが、少なくとも古墳時代中期にまではさかのぼるとみて良いと思う。



図 8 S I 01 出土土師器

参考文献

- 山本清「山陰の土師器」「山陰古墳時代の研究」昭和 46 年
島根県教育委員会「尼寺原遺跡発掘調査報告書」昭和 55 年

V おわりに

前項で、検出された遺構、遺物について概要を述べたが、まだ、どちらも十分な整理検討を行っておらず、不明確、不明瞭な点が多い。この項では、それらの中の、掘立柱建物群及び堅穴住居の概要について、少し説明を加えて結びに替えることにしたい。

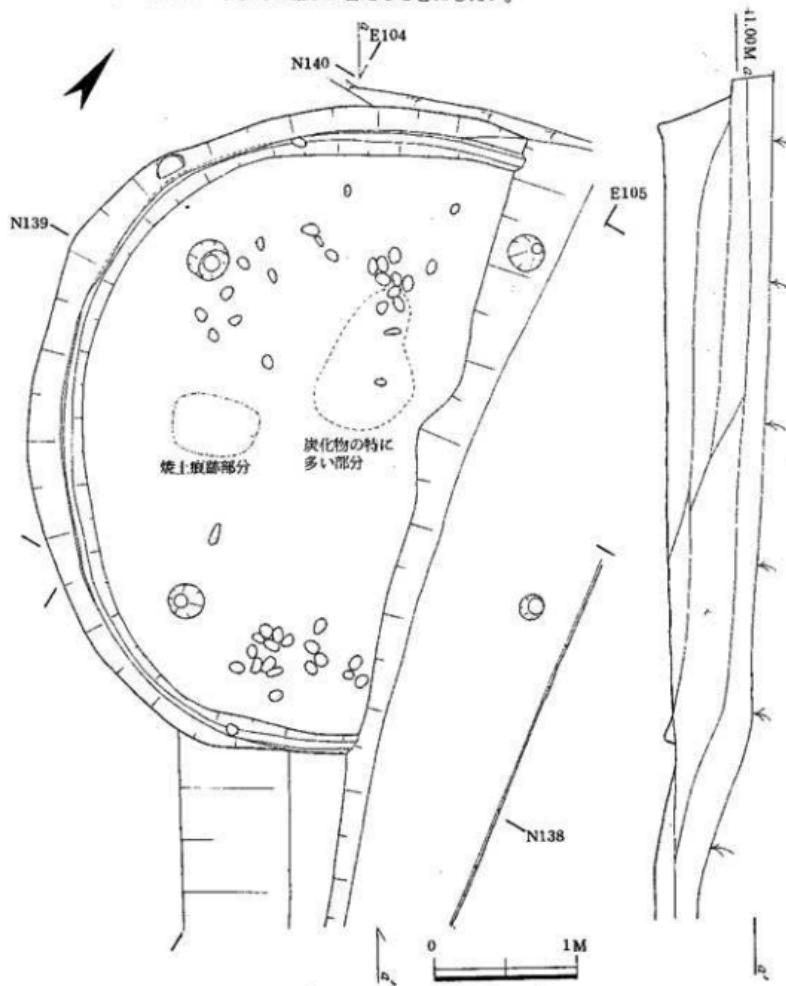


図9 SI01 実測図

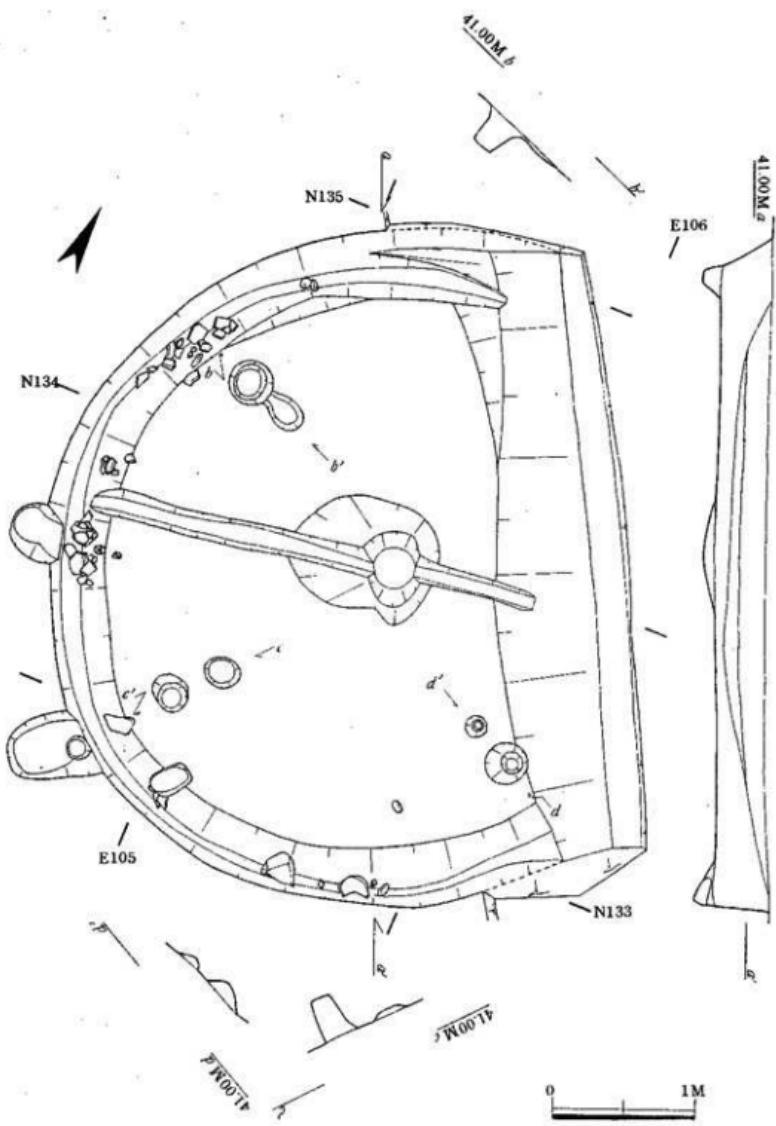


図10 SI02 実測図

1. 塔穴住居について

S I 0 1

地山面からの深さは 6 0 cm 前後で、床面径は 4 m ほどである。柱穴は床面に 4 つと、住居址壁面で 1 つ確認された。壁面で検出された柱穴については、S I 0 1 が埋まってから後のものとも考えられなくもないが、この柱穴は、壁面に食い込むように斜めに掘られており、他の柱の束のような働きをしていた可能性もあり、S I 0 1 の柱穴としたものである。4 柱は、ほぼ正方形に配列されており、大体 2 4 0 cm ほどの間隔である。東側の、地山が削られて、わずかに痕跡を残す 1 つの柱穴を除いて他の 3 柱は、床面からの深さは大体 3 0 cm 前後で、底部レベルについては 4 柱ともほぼ揃っている。柱痕跡ははっきりしなく、どの程度の柱を使用したかは不明である。

床面周囲の溝は、かなり鋭角的に掘られており、溝底部幅は数 cm しかない。深さは、5 ~ 1 0 cm ほどある。

遺物は、床面から土師器の小片と、5 0 個近い玉石が見つかっている。玉石は大体拳大の大きさで、海浜などで普通に見られる、人変滑らかなものである。叩き石等としての使用痕は、顯著なものが見られず、確認はできなかった。これらの玉石が、大きく分けて、床面の北側と南側に敷き詰められたよう形で検出された。又、床面中央や北側部分では、炭化物の非常に多い部分があり、中央西側には焼土の痕跡が見られた。

この S I 0 1 の年代については、遺物が土師器の極く小片と玉石であるため、これらから年代を判定することは困難である。ただ、後述の S I 0 2 と同じ頃と比定すれば、古墳時代中期を中心とする年代であると言える。

S I 0 2

S I 0 1 の南側、約 6 m ほど離れて検出されたものである。地山面からの深さは 4 0 ~ 4 5 cm 前後で S I 0 1 より少し浅い。床面径は 4 m 位で S I 0 1 とほぼ同じである。柱穴は東側部分が削られているため 3 柱しか確認できなかったが、S I 0 1 同様 4 柱を持つものと思われる。3 柱の間隔は、東西、南北それぞれ約 2 4 0 cm、2 3 0 cm で、ほぼ正方形の配列である。

この S I 0 2 の柱穴で特徴的なことは、確認された 3 柱の内側に、それぞれ床面中央に向かって、わずかに離れて柱穴が 1 つづつ検出されていることである。深さは数 cm しかなく、これだけでは柱穴とは言いにくいが、それらの外側にある柱穴は深さが 2 5 ~ 3 0 cm ほどあり、埋土の状態、前述の配列等から、密接な関係にある 2 つで 1 組の柱穴としたものである（内側のを柱穴と呼べるかどうかは別にしてある）。仮に正柱、副柱とでも呼ぶとすれば、この副柱の遺存状態から見て、正柱に対する支えのようなものか、あるいは全く別の機能、役目を持つものか、はっきりした事は分からない。いずれにしても注目すべき点ではある。

床面周囲に切られている溝は、S I 0 1 のそれと比べると少し大きく、深さ、底部幅共に 1 0 cm 前後である。

床面中央に軽跡と思われる、ほぼ凸形の落ち込みがある。上端径 8 0 ~ 1 0 0 cm、底部径は 3 0 cm

前後で、深さは10cmほどである。石組みは無いが、炭化物の量も多く、炉跡とみて間違いないものと思われる。

この住居址床面の中央では、炉跡を横切って、ほぼ南西に走る溝が検出された。幅は10~15cm前後で、床面からの深さは5~6cmである。性格は不明である。

遺物は、床面周囲の溝の底部、あるいは屑の部分から土師器が数点出土している。これらは、前項で述べたように、すくなくとも古墳時代中期にまではさかのばるものである。

2. 掘立柱建物群について

全部で23棟検出されている。一部柱穴からは土師器片が出土しているが、小片であるため年代は不明である。ただ、他の遺構を含めて、この調査区から出土した須恵器・土師器等の遺物（土師器がそのほとんどを占める）で、形の分かるものは全て、古墳時代中期頃から奈良時代にかけてのものであった。又、前述の古墳時代中期を中心とするものとしたSI02との切り合いから、この掘立柱建物群はそれ以降であると言え

る。

ここで、年代については、ひとまずおいて、この建物群の性格について考えてみたい。

奈良時代から平安時代にかけての掘立柱建物は、国衙・郡衙・それらに伴う正倉等の公的建物と、一般住居とが考えられるが、ここで検出された掘立柱建物群は、その規模、配置等を見ると、公的建物とは考えにくく、一般住居として考えた方が良いと思われ、以下、それを基に論を進めたい。

前項では、これら掘立柱建物群を、新旧不明のまま大別して2時期に分けた。それを図化すると右のようになる。

A期の建物は2間×2間が主流で、倉庫と思われる縦柱の建物3棟を含んでいる。B期

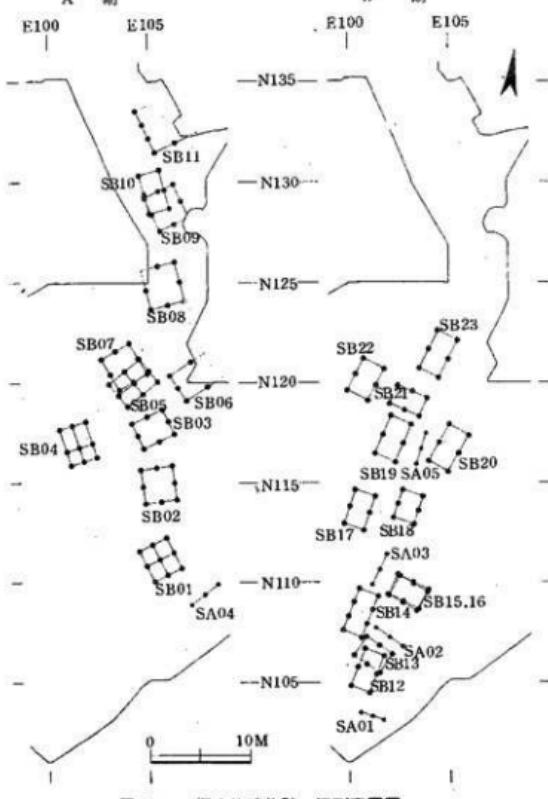
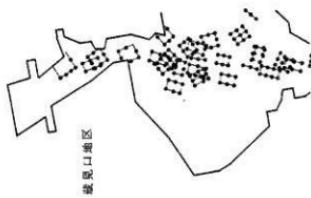
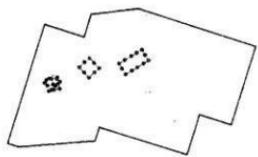


図11 掘立柱建物跡・縦柱配置図



昭君口地区



記寺原地区
◎鳥取縣教育委員會「紀勢以西縣境調查報告書」(昭和55年)

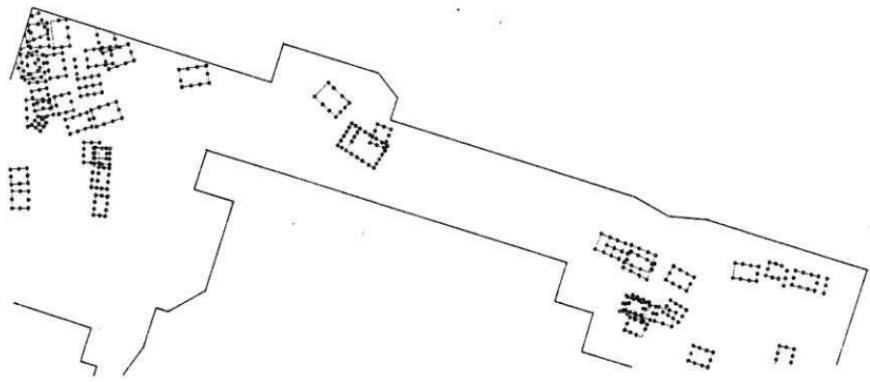


図12. 捨立柱建物配置図

40M

の建物は1間×2間の建物が12棟のうち11棟を占め、他の1棟は1間×3間である。これらは建物主軸の方向だけをたよりに、2時期に分類したわけであるが、図でも分かるように、それぞれの時期の建物は非常に良く似た形式をとっている。この分類の仕方には無理は無いものと思われる。ただ、A期・B期それぞれの時期の中でも建物が重複しており、さらに細分化されると思われるが、伴出遺物、切り合ひ等からは、細分化された同時期のものを抽出することは非常に困難である。

次に、この尼寺原遺跡の他地区の状況を見てみたいと思う。島根県教育委員会『尼寺原遺跡発掘調査報告書』(昭和55年)によると、この蔵見口地区の北東方に隣接する尼寺原地区においては、溝状遺構、堅穴状遺構をはじめとして50棟もの掘立柱建物が検出されている。規模は2間×2間のものから5間×7間にも及ぶ長大なものまで多種多様である。これらは、遺物等から、地域的に数時期に分けられている。大きく分けると、谷をはさんで東側台地と、西側台地の北側、南側となる。東側台地の遺構が一番古く、遺物により、その年代を奈良時代初め、もしくは古墳時代末頃と比定してある。簡単に記すと、尼寺原地区においては、地域的に、西方、北方へ行くほど時代が新しくなっているということである。

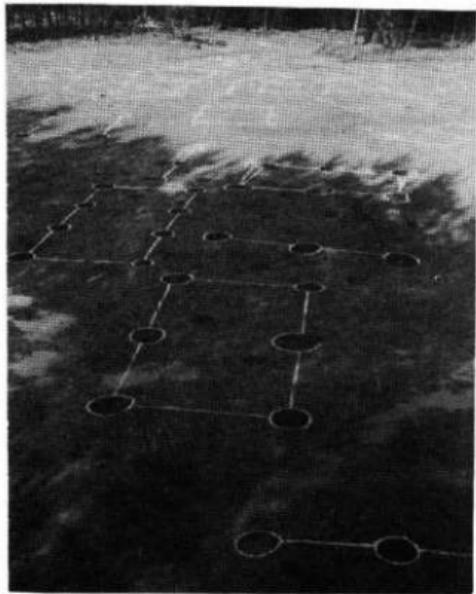
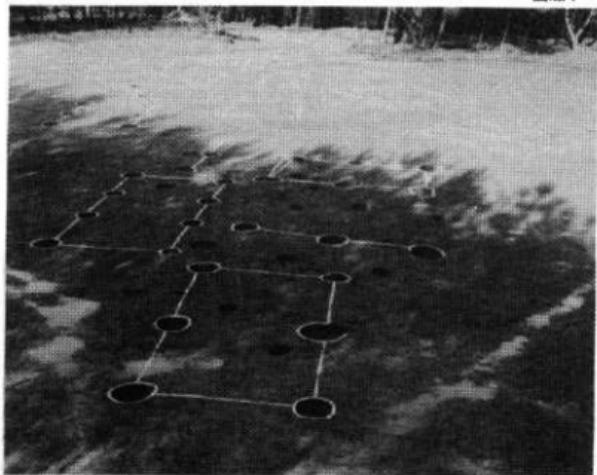
大変危険ではあるが、このことが尼寺原遺跡全体について言えると仮定すれば、この遺跡の南東端にある蔵見口地区の遺構が一番古い年代ということになる。そうすると、S102の年代、尼寺原地区東側台地の遺構の年代から考えると、この蔵見口地区の掘立柱建物群は古墳時代後期を中心とする年代である可能性が強い。

以上、仮定の上に仮定を重ねるような、大変強引な年代判定を行ったわけであるが、いずれにしても、前述の堅穴住居址は、鶴岐鳥居では初めての発見例であり、掘立柱建物群についても、今後の整理、検討により、推論どおり古墳時代後期のものと論証できれば、当時の社会状勢、集落構成を知る上で、非常に貴重なものと言えよう。

参考文献

- 和島誠一・田中義昭「住居と集落」 河出書房『日本の考古学Ⅲ』 昭和41年
島根県教育委員会『团原遺跡発掘調査概報』 昭和53年
小笠原好彦「畿内および周辺地域における掘立柱建物集落の展開」
考古学研究会『考古学研究』第25巻第4号 所収 昭和54年
田中勝弘「古代郷倉について—滋賀県高島郡今津町弘川遺跡の検討—」
京都教育大学考古学研究会『史想』第18号 所収 昭和54年
島根県教育委員会『尼寺原遺跡発掘調査報告書』 昭和55年

図版1



調査地（南から）

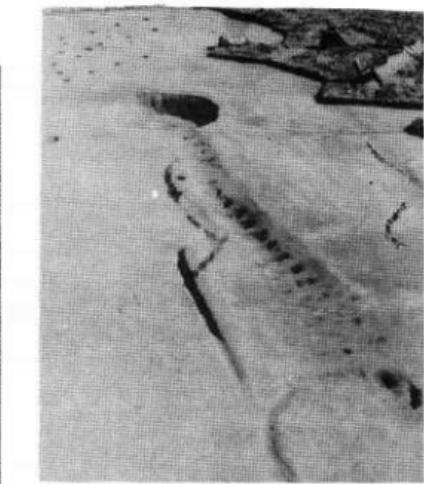
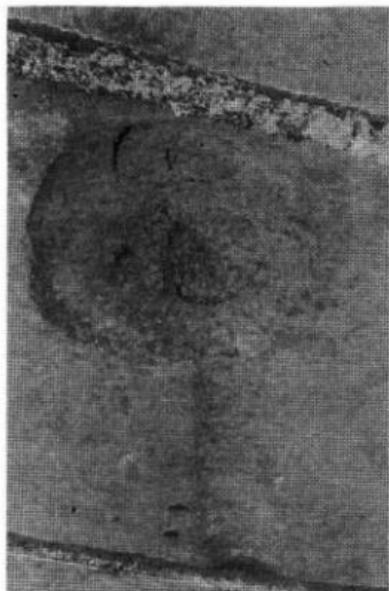
図版2



調査風景



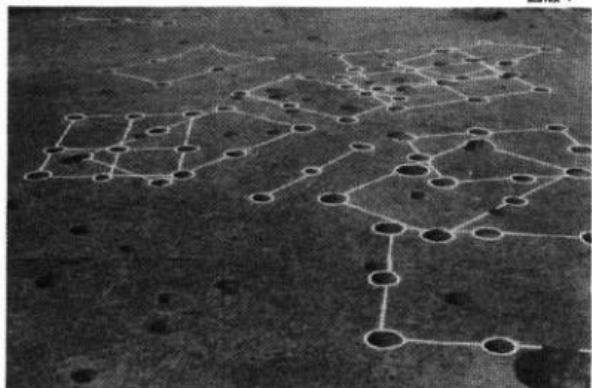
SK01, SD01・02 及び建物群（南から）



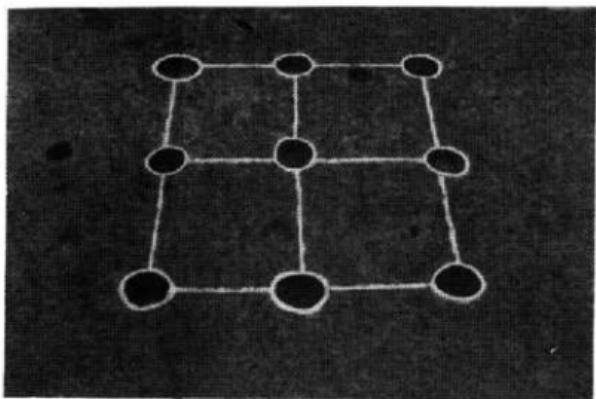
SK01, SX02・03, SD03（北から）

SK01（1箇のみ除去）、SD02（南から）

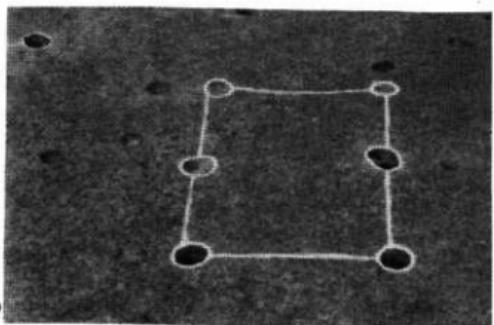
図版4



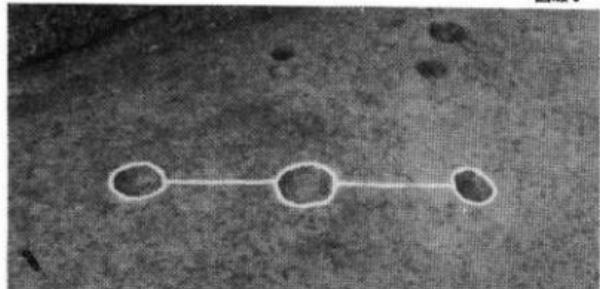
SA05付近の獨立柱建物群(東から)



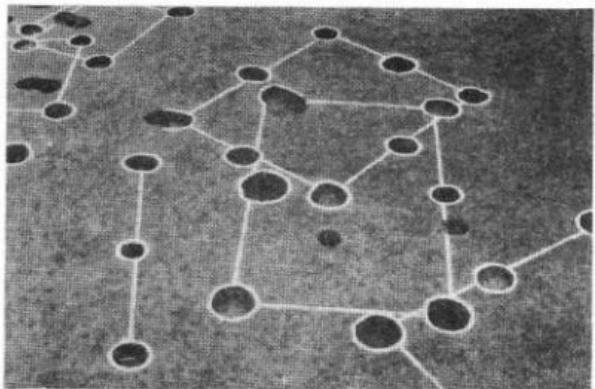
SB01(南から)



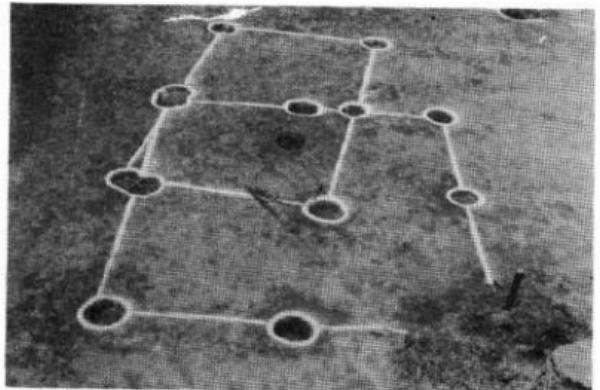
SB22(南から)



SA01 (北から)

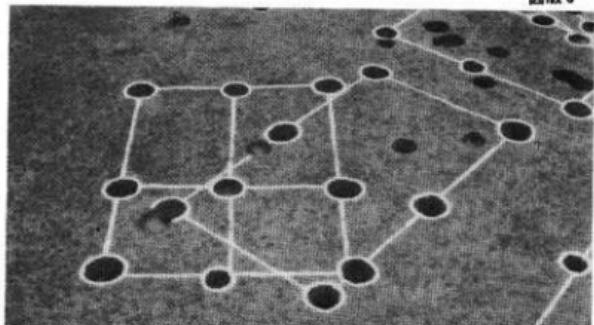


SA05, SB20・03 (南から)

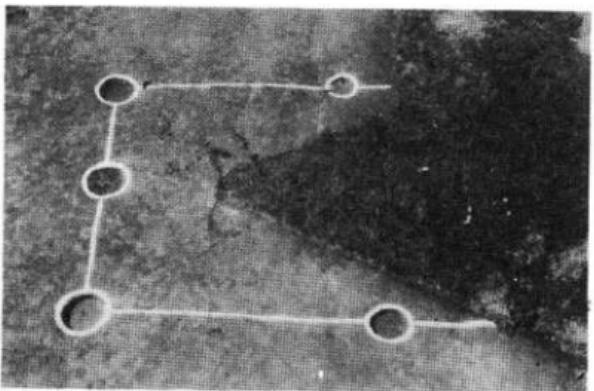


SB09・10 (南から)

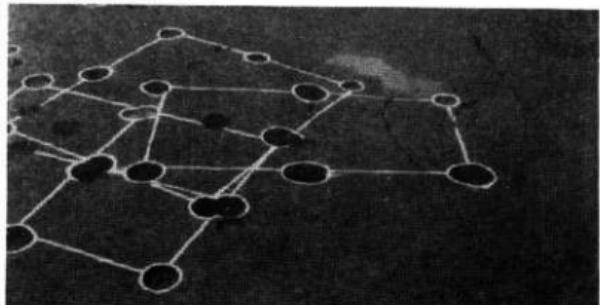
図版 6



SB04・19(南から)



SB06(南から)

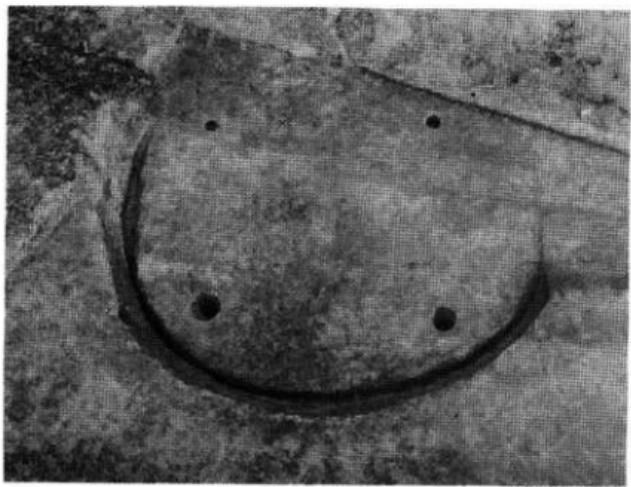


SB05・07・23(東から)

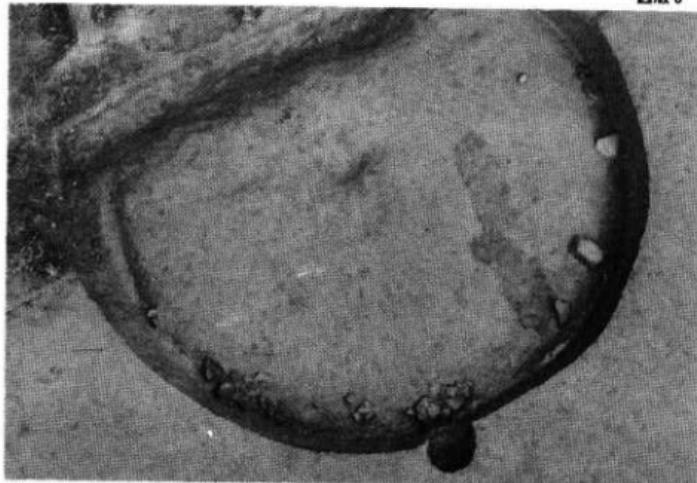
図版 7



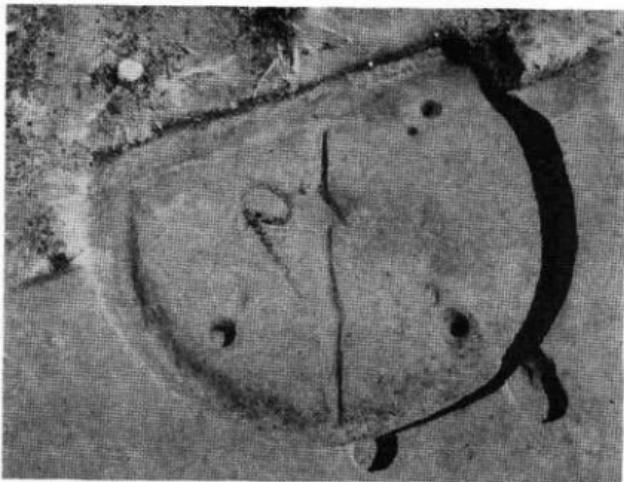
SI01 内遺物出土状況（西から）



SI01（西から）



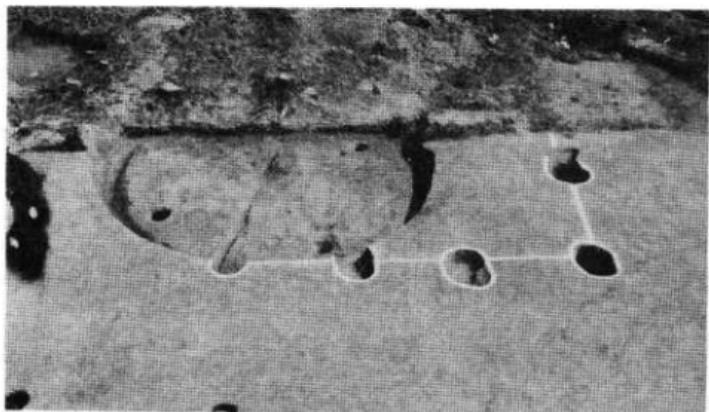
S102 内遺物出土状況（西から）



S102（西から）



S101・02 (北から)



S102, SB11 (西から)

甲ノ原遺跡発掘調査概報Ⅲ

編 集 隠岐島後教育委員会
〒685 隠岐郡西郷町西町八尾の1-58

発 行 昭和57年3月31日
